

開幕セレモニー報告

日時: 11/24 (金) 12:45-13:30

会場: 科学技術振興機構 1階 アゴラステージ

〈登壇者〉

濱口 道成 科学技術振興機構 (JST) 理事長
新妻 秀規 文部科学省 文部科学大臣政務官
原山 優子 内閣府/総合科学技術・イノベーション会議議員
吉村 隆 日本経済団体連合会 (経団連) 産業技術本部長
Tai Hyun Park 韓国科学創意振興財団 (KOFAC) 理事長
真先 正人 科学技術振興機構 (JST) 理事

〈司会〉

柴田 孝博 科学技術振興機構 (JST)
科学コミュニケーションセンター 事務局長

■概要

12年目を迎えたサイエンスアゴラの目指すビジョンは「科学とくらし ともに語り 紡ぐ未来」。今年は、テレコムセンタービル1階の特設ステージで開幕セレモニーを開催しました。濱口道成JST理事長による主催者挨拶の後、国内外の来賓4人が祝辞を述べました。来賓挨拶の後、サイエンスアゴラの新たなロゴデザイン3案も発表され、最後に、真先正人JST理事が開幕宣言しました。

■内容

SDGsの17項目に掲げられた国際目標は「日本の課題」

「アゴラ」は古代ギリシャ語で「広場」を意味します。あらゆる立場の人々がひとところに集い、科学についてともに語らう複合型フォーラム「サイエンスアゴラ」の名称にふさわしく、映像を映し出す大型ビジョン前の広場には、各界から国境を超えて多数の人々が列席。華やかな映像、音響とともにセレモニーが幕を開けました。

冒頭、登壇したJSTの濱口理事長は、今年のテーマに「越境する」を掲げた理由の説明の中で境界を超えて達成すべき目標として、国連の国際目標「持続可能な開発目標 (SDGs)」17項目を挙げました。SDGsは、2015年の国連サミットで採択された2016年から2030年までの国際目標で「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されました。濱口理事長は、「社会のための科学を志していく」というJSTの立場を明確にした上で、「『SDGs』は、実は日本の課題でもある」と指摘しました。その根拠として、OECD加盟34カ国 (新加盟国のラトビアを除く) の中で、日本はSDGsの達成率が中位にとどまったというドイツのベルテルスマン財



団による調査 (2016年7月時点) を提示。達成率を引き下げる要因の一つである、貧困やジェンダーの問題が依然として根強い、と述べました。

「日本の最貧困層に (一部の) 20代のシングルマザーが存在する。年収100万円以下だと、その子どもたちは、ご飯も十分食べられず、遠足にも行けない状況になる。お腹が空いているから、勉強に身が入らない。その結果、教育が妨げられる。負の連鎖により貧困の連鎖が起きています」

濱口理事長は、また、「すべての人々に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する」という「SDGs」6番目の目標について触れ、「我が国も無縁ではない」と強調しました。食料自給率が40%を切る日本は、「バーチャルウォーター」と呼ばれる「仮想水」(食料や畜産物の輸入消費国が、自国でそれらを生産すると仮定した時に必要となる水の推定量) の観点から、「膨大な水を間接的に輸入している当事国。SDGsが解決すべき課題として掲げている目標は、私たちの問題です」と述べ、「科学が皆さんに近いものになるように、そして、日本の未来が科学技術の活動を通じてもう一度明るくなるにはどうしたらいいか、サイエンスアゴラ2017のそれぞれのセッションを通じて、あらためて考えてみたいと思います」と挨拶を締めくくりました。

社会の共感と信頼の醸成に向けた「広場」の役割

文部科学省 文部科学大臣政務官の新妻秀規氏から、2016年に閣議決定された「第5期科学技術基本計画」の中で、未来社会の姿として打ち出された「Society5.0」やSDGsが目指す社会像などについて説明がありました。2006年から毎年開催されているサイエンスアゴラについては、「あらゆる人々に開かれた科学と社会をつなぐ広場であり、科学技術を活用してよりよい社会を実現するための方策を論じ合う場。目指すべき社会をさまざまなステークホルダーの方々が共創する上で、今回のテーマでもある『越境』が重要な鍵になる」と期待を語りました。



内閣府/総合科学技術・イノベーション会議議員の原山優子氏は、学問分野、組織、制度、国や言葉、文化の壁など、あらゆる「壁」が存在する今日においては、今回のサイエンスアゴラ2017のテーマでもある「越境」の実践が欠かせない、などと強調。それらをどう実現するかが「次の課題」で、サイエンスアゴラは「その知恵出しの機会」と述べました。

さらに、SDGsにもつながる「Society5.0」の考え方を実現するために、科学技術に対する「社会の共感と信頼」が前提となる、という観点からの話がありました。現在、日々の生活から生産されるデータが経済活動に活用され、人工知能がさまざまなところに浸透していく時代であり、だからこそ、「何を良しとし、何が起用されるか、そして何に制限をかけるべきか、といった議論が社会全体でなされることが必要です」と述べました。

続いて、経団連産業技術本部長 吉村隆氏が登壇。経済界を担う経団連にとって、「科学技術・イノベーションも非常に重要な取り組みの一つ」という前提から、経団連が総力を挙げて取り組んでいる「Society5.0」の実現に向け産業界がどのような取り組みをしているか、についての紹介がありました。



「AIやIoTを活用して生産性を高める。個別化医療や新しい治療方法を開発することで、健康寿命を伸ばす。さらには、環境エネルギー面でも、道路交通システム、自動運転、スマートシティといったシステムをより高度化することで、環境と経済が調和するような持続可能な社会を築く」。こうした取り組みの先に、「日本社会や世界経済が抱える課題を解決し、世界全体にも貢献できるような姿を考えている」というビジョンを述べました。そのためにも、「基礎はサイエンスにある」と提言し、サイエンスアゴラという「広場」が担う役割への期待を語りました。

科学と社会の「分断」をコミュニケーションにより橋渡しする

韓国科学創意振興財団 (KOFAC) 理事長 Tai Hyun Park 氏は、コンピュータに大きな革命をもたらしたスティーブ・ジョブズ氏が「このまま一生砂糖水を売って過ごしたいのか、私と世界を変えてみたくないか?」という口説き文句でマーケティングの天才、元ペプシコ社社長のジョン・スカリーを自社に招き入れたエピソードを紹介。「第4次産業革命を目の当たりにしている今、新しいタレントとの協働がますます重要になってきている」と述べました。また、「越境する」という今回のテーマを実現するために努力していくとともに、「科学と社会との間の分断をコミュニケーションによって橋渡ししていくべき」と提言しました。



その後、日本学術会議会長である 山極壽一氏の祝辞を柴田事務局長が代読しました。

祝辞の中で山極氏は、「複雑で解決が難しい数々の問題を抱えるようになった世界情勢において、理想的な社会、人間の幸福とは何かについて、私たちは根本的に考え直す時代に差し掛

かっているのではないかと問題提起。「どれだけ情報技術が発展しても、人間社会の根源が変わるわけではなく、直接会って話す場なくしては、人間社会、言語によるコミュニケーションが構築された私たちのこの世界は崩壊する」と危機感を示しました。また、「私たち科学者が社会に出て行って、社会や皆さんと世界観を共有するこのような機会は大変重要。科学とは何か、社会とは何か、皆さんがこの対話の広場で考えるきっかけが得られることを願う」と、サイエンスアゴラへの期待の言葉で締めくくられていました。



最後に、京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab の新ロゴ検討チームリーダー・同大学博士前期課程2年 誉田そよ子さんから、「複眼」「パルス」「心臓」と題された3つのロゴ案のプレゼンテーションがあり、「科学と暮らしともに語り 紡ぐ未来」というサイエンスアゴラのビジョンをより多くの人に認識してもらうための手段の一つとして提案するこれらのロゴについて、「ぜひ、皆さんのご意見を伺いたい」と呼び掛けました。

最後に真先正人 JST 理事が開会を宣言。サイエンスアゴラ 2017 が幕を開けました。

■まとめ

主催者挨拶では、国際目標であるSDGsが掲げるテーマは、現代日本の課題そのものであることが指摘されました。さらに、4人の登壇者により、今回のテーマでもある「越境」こそが科学と社会の分断を超える重要なファクターであり、垣根を超えたステークホルダーによる議論の場がますます必要だと提言がありました。セレモニーの登壇者それぞれの立場からの発信により、あらゆる垣根を超え、議論する場としての「広場」、すなわちサイエンスアゴラのような機会が重要性を増してくるという意識共有がなされました。

■ライターのひとつこと

地球規模で社会が変化し、その変化のスピードも加速しているなか、科学と社会の間には依然として多くの課題が立ちほだかっています。そんな社会状況は、時に、私たちの不安を増強させます。けれども、多くの人が集い議論し合う場を持ち、立場を超えた人々が知恵を出し合うことで信頼性を獲得したサイエンスは、世界のあらゆる場所にある社会の分断をつなぎあわせる架け橋となる。そんなビジョンが明確になったセッションだと感じました。

文責：古川雅子 (医療・科学ライター)